

2. マクグラスと自然神学構想

前期の講義では、「近代的知」について、現代神学における自然神学構想の意味を、マクグラスの次のテキストをもとにして、検討する。

Alister E. McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

A. マクグラスの自然神学構想

テキストの概要（第1章：序論—自然神学をいかに論じるのか）

- (1) 自然神学の再構築をめざして
- (2) 啓蒙主義的自然神学を超えて
- (3) キリスト教と自然
- (4) 本書は三部構成になる。

- ・第一部：超越的なものに対する永続的な人間の関心についての考察、世俗時代にも存続、永続的な意義と価値があると考えられるものとの出会うことによって、現世的存在を超える試みを行う際の方法と技術を叙述

↓

知覚の心理学についての現在の理解に対応 (人間存在の宗教性)

- ・第二部：超越的なものへの人類一般の探求ではなく、実在についてのキリスト教的ヴィジョン（三位一体の受肉的な存在論に基づく）に照らして構成された自然との関与としての自然神学

自然神学的な試みの歴史的起源と概念的な欠陥の詳細な探究

- ・第三部：感覚・知覚形成の企てとしての自然神学概念から、その課題と可能性のより広く豊かなヴィジョンへ。

自然神学への合理主義的アプローチではなく、自然と人間との出会いのすべての局面（合理的、想像的、道徳的）を包括するものと考える。

- (5) 「自然」は曖昧な概念である。
- (6) 自然神学は経験的な学科である。
- (7) キリスト教的な自然神学はキリスト教の神に関わる。
- (8) 自然神学は受肉論的であり、二元論的ではない。
- (9) 共鳴、論証ではなく：自然神学と経験的適応。
- (10) 知覚形成を超えて：善、真、美。

<マクグラスの自然神学構想のポイント>

1. 自然神学とは

①キリスト教的自然神学

1) 聖書的前提 2) 古代ギリシャの自然学

②広義の自然神学

人間存在の宗教性

人間存在に本質的に構造化された宗教的仕組み（志向性）

①と②との関係はどのように考えられているのか？

2. 自然神学の歴史性

・啓蒙主義の意義、それがもたらしたもの ・啓蒙的近代からポスト近代へ

3. 自然神学の方法の問題

・見る・解釈する、指示する → 言語論的議論へ

↓

知覚の心理学、脳神経科学

4. 自然神学の意義

- ・公共性、学際性：弁証的意義
- ・人間存在の変革：倫理的実践的意義

5. 思想史研究者マクグラス

- ・マクグラスの議論の強み

博学な思想史的知識を整理した仕方で提示する
視野・問題関心の広さと着実さ

↓

何が問題であり、その議論の歴史的基盤はどこにあるか、という点の明晰さ
議論の出発点として安心して依拠できる

啓蒙主義の問題性

- ・弱点：哲学的な議論の展開が不足している

近代のカント以降の哲学的議論、とくに解釈学的哲学が提出した問題
がやや不足している。批判的実在論もそれ自体として、どれほどの議論
がなされているのか。

実践的なテーマの取り扱いが希薄

B. 第三部 真理、美、善

——自然神学の革新のための基本方針(agenda)

第九章 真理、美、善

——自然神学構想を拡張する(=第三部の序)

- (1) 第三部の目的・意図
- (2) 自然神学の射程
- (3) 啓蒙主義批判の系譜
- (4) 自然への包括的アプローチと無神論への応答
- (5) キリスト教自然神学の伝統とその再建

5. マクグラス——自然神学と真理

<第10章の構成>

前章の問題設定(真・美・善)を受けて、この章では、「自然神学と真理」を扱う。

1. 自然神学を知的・命題的思考との関わりに限定して論じる。
証明ではなく最善の説明、大きな描像、人間原理、数学、伝統超越的な合理性
2. 真理の豊かさの回復
3. 真理と想像力(構想力)

<テキストの内容・概観>

1. 伝統的な自然神学の多くは、世界についての経験の合理的理解に関わってきた。知覚されたことに基づいて、世界についてのいかなる説明が提出できるのだろうか。

啓蒙主義に関連づけられた様式の自然神学の限界=啓蒙主義的な真理概念(真理の合理

的論証)の限界。

2. 「真理」概念：知的で命題的な思考を含む「見る」というプロセス。

心・認知におけるスキーマ(Schema)：世界の心的地図であり、また世界と交渉することを可能にする規則あるいは筋書きの集合体。

(1) 共鳴、証明ではなく：自然神学と理解可能化

3. 一八世紀の偉大なボイル講義：無神論の挑戦の台頭に直面して、キリスト教信仰の真理を証明することを目指す。「無神論の公的な論駁」は、創造者としての神の知的必然性と豊かな説明力を論証することに基づいていた。評価に値する多くの事柄。

世界創造を仲介したロゴスが被造的秩序の諸構造、とりわけ人間の人格に組みこまれ、そしてキリストにおいて受肉した。

4. しかしこの洞察は、自然に訴えることに基づいて神の存在を「証明する」ことが可能であり、したがって、自然神学を神の存在と特性を確立しようとする知的に自律した試みと考えることを意味しない。むしろ、自然神学とは、キリスト教信仰に基づく自然へのアプローチ＝自然を特定の仕方で「見る」こと。

5. 「証明」ではない(＝啓蒙主義的自然神学批判)。しかし、キリスト教的伝統によって提案された神の現実存在が、世界について観察されるであろう事柄を理解可能にする主張(＝自然神学の改訂・革新)。

キリスト教的信念の核心の証明ではなく、有神論的世界観と観察との共鳴についての論証。すでにそれに関与している人々の世界観の信憑性を強化する。何らかの世界観を証明するという役割を果たすことはあり得ない。世界観の事柄は、経験主義者の主張にもかかわらず、経験的な仕方で解決することはできない。

では、世界観を基礎づけるものは何か。信仰と世界観との関係は？(ブルトマン)

↓

6. 問題：観察される事柄の最善の説明(the best Explanation)とは何か？

ハーマン：「最善の説明への推論」の方法

パース：「アブダクション」(仮説形成、仮説的推論)

仮説の観察された諸結果から、その仮説内部に含まれた説明的な先行物を推論する。

cf. 科学的発見の方法：演繹と帰納に対して。

↓

不規則現象の内に一つの仮説的秩序を見出す思考過程

何が「最善」かについての基準の問い。

7. この基準自体が、論争対象である。

- ・様々な認識的徳(単純さ、優美さ、知の統合、簡潔さ)に訴える試み。
- ・ベイズ確率理論を競合する諸説明の評価に組み入れる試み。

曖昧さが残る。

しかし、科学的方法自体が究極的には、世界の観察とのアブダクティブな関与を表現しているという判断は妥当である。

経験主義的方法を、超越的なもの一般、とりわけ神の信念に、適応するに困難はない。

8. キリスト教の第一義的な関心である救済のメッセージには、説明的な要素が伴う。

シュヴィンバーン(Richard Swinburne)：

有神論は世界の秩序を理解可能にする説明的力を有する。

自然神学は、説明を要する世界の諸特徴に関与する。

1. 宇宙の明白な秩序
2. 有益な宇宙の歴史（微調整された諸条件）
3. 宇宙の諸部分の相互連関性
4. 宇宙内部の秩序と無秩序の並存
5. 超越的なものについての人間の一般化された気づき

9. キリスト教の創造論に基づくならば、宇宙は知解可能であると同時に偶然的、宇宙の知解可能性は、神の合理性内にあるその偶然的な源泉を反映している。これが、次の議論の背後にある。

心の法則と自然の法則との内的関係（マックスウェル）

独立した世界の知解可能性とそれを知覚する主観との先行的に確立された調和（アインシュタイン）

(2) 大きな描像、ギャップではなく：自然神学と世界の観察

10. 革新されたキリスト教自然神学

大きな描像を把握することの重要性、世界の説明可能性自体が説明を要求する。

ギャップ(gaps)は存在するにしても、それに注目しない。

実在全体について観察されることを説明すること。

11. 「ギャップの神」へ訴える古いやり方（知的設計を含め）への批判

歴史的に、科学の進展の可能性

神学的に、神を狭いギャップの押し込めることは、神の活動性を、被造物のほかの領域から排除することになる。

cf. ボンヘッフアー、世俗化とは何か

12. クールソン(Charles A. Coulson)：

科学とキリスト教神学との対話の促進、実在の統一的ヴィジョン

完全に画定された科学的領域と宗教的領域という考え方を拒否

権威の移行が生じる境界線を徴づけることの誤り

実在の二分法→一人の人間が科学と宗教の双方に忠誠を認めることへの不寛容

科学による新しい発見が宗教の領土を侵すことを招く

実在の全体は説明を要求する。神は自然全体の内に存在するか、あるいはどこにも存在しないかのいずれかである。

13. 「大きな描像(Big Picture)」(宇宙の内部に識別される秩序化の全体的な諸パターン)

を説明する際に、神の信念が重要であることを強調。

シュヴィンバーン：有神論の説明的局面は実在の細部を超えて拡張される。科学が説明するには大きすぎるか、奇妙すぎるか。説明が信頼性には批判の余地がある。しかし、説明が提出されており、それが重要に見えることは疑い得ない。

宇宙についての「大きな」「奇妙な」事柄：人間現象

(3) 自然神学、直観に反した思考と人間現象

人間現象(Anthropic Phenomena)あるいは人間原理(anthropic princile)という議論

用語の選択の問題性

より古い世代の用語(biocentric)の方が好ましい。ヘンダーソン

14. 「微調整」（微妙なバランス）された宇宙：

宇宙史のこの時点で地球上に知的生命が出現するのに有利な諸特性を、宇宙は最初から有していた。生命へ親和的な諸価値。

人間現象：自然の基礎定数から、化学、生化学、進化論的生物学へ。

「自然の基本常数は確かな仕方で生命と親和的な数値をもつことが判明している。地球上の炭素系生命の存在は宇宙論的で物理的な諸力とパラメーターとの精巧なバランスに依存しており、これらのどの数値でもそれがほんのわずか変化しただけで、バランスが崩れ、生命は存在しないことになるだろう。宇宙の重力定数、中性子の質量、あるいは電子の電荷がごくわずかな変動するだけで、一切は変化してしまい、人間という観察者の出現は不可能になってしまう。」

15. これらの現象の存在は広く認められ議論されているが、その解釈についてコンセンサスは存在しない。

- ・形而上学的帰結を引き出すには懐疑的な立場
- ・多様な宇宙の可能な集合から、たまたま我々の宇宙は生命が存在しうる条件を有するものとなったとの議論。多世界論
- ・観察者の視点

↓

様々なアプローチは可能であるが、こうした現象は神の存在の論証として論じられるのではなく、キリスト教信仰の神観と一貫すると論じるということ。実在についてのキリスト教的見方の中心的テーゼと人間現象の観察との共鳴。

16. 反事実的条件文（反事仮想）

事実とは別の事態を仮定し（事態は現にあるような仕方である必要・必然性はなかった、別様にあってもよかった）、思考実験と通して、別のシナリオを構成する。

C.S.ルイス（『ペレランドラー——金星への旅』）の例

墮落のなかった世界を想像→現実の世界についての理解を深める
世界の諸局面を顕わにする

（4）自然神学と数学：実在を記述する「自然な」仕方

17. 自然神学特有の言語の文法と構文、数学という言語

ケプラーの場合：惑星の楕円軌道。それを記述する数学の能力の神学的根拠付け。

幾何学は神の精神に起源を有する。

幾何学は神的精神の部分、世界創造のためのパターン、神の像によって人類に移される。

ケプラーからアウグスティヌス（神の像）に遡及

神の合理性、宇宙の合理性、人間の合理性との共鳴

自然の言語としての数学

cf. プラトニズム

18. 数学のこの力はいかなる根拠を有するのか、という問いの重要性（デイヴィス）。

「ときに人間精神の自由な創造物とも考えられる数学に、なぜこのような力があるのか。フラクタルとひも理論はいずれも人間精神の自由な創造物と見なされねばならないが、それにもかかわらず、双方とも自然秩序を記述する傾向を内蔵していると見られている。」

19. ペンローズの三世界論：数学的形式の世界、外的な物理的世界、意識的知覚の世界

プラトンの、物理的、精神的の三つの世界がいかに合致し相関するのかという神秘につ

いてのペンローズの説明＝数学へのプラトンのアプローチによって解決

数学的観念の実在的世界、観察される物理的世界、物理的世界の表現において構成される精神的世界の間には、相互交流がある。ペリコレシス（属性交流）

20. キリスト教的伝統は数学の驚くべき性向を理解するために別の仕方を提供する。

世界と精神の被造的対応、同一の神の創造、同一の神的ロゴス

トランス：数学の力は包括的な前提（事物の偶然的秩序全体が現にあるために依拠する）をいかに明らかにするのか。それは、偶然的秩序自体の合理的な枠組みの内部からではなく、それを超えたところからなされる。

システムの内外部、根拠付けの問題

世界についてのキリスト教的洞察と世界について現に知られていることとの間の本質的な調和。キリスト教神学は、自然の探求から垣間見られたより偉大な実在を確固なものとする存在論的基盤を与える。もちろん、キリスト教的伝統の立場の内部で。

（5）真理、自然神学と他の宗教的伝統

21. キリスト教的伝統の内部から、共通の人間の知性の展望を示し探求するための出発点を提供する。

自然神学はキリスト教的伝統に特有なものではあっても、普遍性の憧れを有している。伝統特有ではあるが伝統を超えた合理性を具体化する。

→ キリスト教とそのライバル双方についての洞察を与える。

これらは普遍的な仕方で受け入れられている基準によって証明されているわけではない。そのような基準は存在しない。

キリスト教自然神学はメタ伝統的装置として機能する。

啓蒙主義的な「伝統超越的な合理性」→伝統特有の合理性

→伝統特有で伝統超越的な合理性

a tradition-specific yet trans-traditional rationality

22. 十全な自然神学

実在についてのキリスト教的洞察は、教会の領域の外で、福音の響き、暗示、うわさ、予期が存在することを、認める。

トールキン：すべての宗教と世界観は神話（実在を説明する試み）に基づいている。より大きな全体の或る局面（分散された断片的光）を反映する。キリスト教も神話という構造的形式をとるが、すべての他の神話がその近似に過ぎないような現実的な神話である。

ルイス：キリスト教と他の宗教との類似性は、実在についてのキリスト教的見方の包括的性質に基づく。

すべての人間に何らかの神的照明が与えられている。

23. キリスト教が大きな物語を提供するということ。

真理は受肉する。神話は事実となり、事物の本質的意味は神話という天界から歴史という地上へ降りてくる。

すべての事物を理解可能にする。下位の物語を派生させる。下位の物語を設定し説明し、福音の大きな物語にその完成を見出す。

24. キリスト教的伝統外部における世界への部分的かつ断片的であるが、しかし現実的な洞察の存在を肯定できる。キリスト教的伝統はその十全な開示である。

S. Ashina

- 宣教論へ：神的ロゴスはすべての信仰において働いており、それはキリスト教宣教が
発展させるべき橋、門となる。cf. 神の宣教(Missio Dei)か、教会の宣教か
25. 他宗教の信徒との対話の問題、エディンバラ宣教会議（1910）
その土地の文化（キリストにおいて、キリストを通して完成される）への尊敬と関
わりを要求する。土着文化と福音の「接触点」
↓
宗教の神学へ。公共性の問題として。

（6）真理の豊かさの回復

26. 自然神学における過度の合理主義の危険
ニューマン：真理のより古い観念の再発見、真理とは知覚の複合的行為（理性を超えて
いる）。想像力と理性。
27. マルセル：問題と神秘との区別
存在論的神秘の世界は単なる分析によっては接近できない。
自然科学によって扱われる問題解明的な世界
ファラ：正しい答えが存在する問題の領域
神秘の領域、問題を見つけ解決するという仕方では探求できないレベルにお
ける実在との関与を含む。
自然神学は、前者を限定されない。問題群としてではなく、単一ではある多種多様な
神秘として、対象自体と向かい合う。
28. 真理の关系的含意：ブルナーの『出会いとしての真理』
神関係の文脈。信仰は、神との人格的な出会いである。
真理は、人格的概念である。主観客観の二分法はキリスト教神学における破壊的要素で
ある。聖書の啓示は客観主義と主観主義を超えた、歴史における出来事である。
歴史が神を啓示するのではなく、神の自己啓示が歴史的過程の内部で起きる。
啓示は純粹に命題的で知的ではなく、神の行為、イエスキリストの行為として
理解されねばならない。
cf.パネンベルク
29. 自然神学：人間と自然秩序との正しい関係性を確立する企ての一部となる。情報を議
論するだけでなく、態度を変化させる。→ 倫理

（7）真理と想像力の自然神学

30. 自然は驚きを生じる。想像力を刺激する。これが引き起こす問いは、科学的としばし
ば分類されるが、科学が答えることを望み得ない問いとなる。人間本性の想像的深みに浸
透する。
啓蒙主義的な自然神学にもかかわらず、経験と理解、知覚と認識との根本的な再結合が模
索されねばならない。真の自然神学は理性のみならず、想像力に訴える。
↓
31. 「洗礼を施された想像力」(baptized imagination)
ルイス：理性に訴えることの重要性を強調しつつも（自然神学への伝統的なアプロ
チ）、より根本的で切実な（説得的な）、想像力に訴えることによって、補足されている。
理性と想像力は、実在の包括的な説明でそれぞれの役割を演じている。

理性は真理の機関である。想像力は意味の機関であり、真理の原因ではないが、その条件である。

自然神学への想像的な接近の回復の可能性の一つ。世界への応答における想像力の役割。世界は世界を超える何ものかを指示する。

32. アウグスティヌスの記号論：

「しるし」(signum) と「しるしづけられたもの」(significatum)
『キリスト教の教えについて』

- ・自然的記号／所与の記号（非意志的／意志的）

神は、啓示という明確で明瞭な行為に加え、被造的秩序の中に、神の本質の痕跡を残した。

- ・使用／享受：signum はその significatum への門として使用する。享受されるべきものとしての神。

33. ルイス：記号は理性に情報を与えるよりも想像力を捉える力を有することに気付いていた。

自然の世界との関わりが想像の世界の構成の基礎となる。空想のモデルとしての自然。想像的世界への記号としての自然。

34. トールキンの神話作成論

神話作家は下位の創造者であり、創造者としての神によって靈感を与えられている。至高の創造者の世界の模写。

神話の意義は分析的推論によって容易に書き留られるものではなく、詩人（予期れるものを感じる人）によって提示されるときに、最善の現れを示す。

下位の創造者は秩序、美、善の世界を創造する。それは神的世界の生気のない反映に過ぎないとしても、神的世界に依拠している。

<コメント>

1. トランス → マクグラス：イギリス自然神学の現在のライン

神の自由（偶然性）→偶然的世界の合理性（知解可能性）

↓

キリスト教とプラトニズムの関係についての本格的議論を必要とする。

数学の意味（ペンローズ）、キリスト教思想にとって数学とは何か。

2. ギャップの神からの脱却、この文脈で、結局、超自然とは何か？

3. 人間原理は、世界システムの根拠付けが、世界の内部あるいは外部で可能になるのかについての理論的考察が必要。 → システム論・言語論の必要性（後期）

4. 特殊伝統的で伝統超越的な合理性（普遍性）→宗教の神学

- ・認識論と存在論
- ・包括主義

マクグラスは啓蒙主義を超えたのか？

5. ルイスとトールキンへの言及。 → 文学とキリスト教思想。

6. 真理概念の問い直しの問題

理性と想像力 → ハイデッガーのカント解釈

↓

美の問題へ、想像力から倫理へ：リクールによるイエスの譬え解釈（後期）

善